

聞き手の発話解釈に感動詞が関与する程度差について —暗示的意味を中心に—

梅 木 俊 輔

1. はじめに

「おっ」「さー」「ふーん」等、品詞論上感動詞と呼ばれ、話し手の感情の動き、感動を表現すると捉えられている発話がある。これらの発話は、従来、主として無意識で反射的な音声単位とされてきた。これに対し、近年、感動詞は聞き手が発話解釈で行う推論を支援するという新たな捉え方が認知語用論的アプローチから提示されている (Blakemore, 2011, Wharton, 2009, Wilson and Wharton, 2006)。

例えば、英語で使用される *eh?* に関して、下記 (1) のような発話から、聞き手には意味表示として (2) あるいは (3) のような明示の意味が復元される。

- (1) Dentist: So you're having three teeth out, *eh?*

「歯科医：それであなたは三本抜歯しているんですね。」

- (2) The dentist is asking whether I'm having three teeth out.

「歯科医は私が三本抜歯しているかどうかを尋ねている。」

- (3) The dentist is requesting confirmation that I'm having three teeth out.

「歯科医は私が三本抜歯していることについて確認を求めている。」

(Wharton, 2009: 85)

上記のような意味表示が復元される際、感動詞は聞き手に当該の文脈の意味表示が復元されるよう予め限定 (制約) しているに過ぎないとされる。上記

(1) の発話の意味表示において「尋ねている」、「確認を求めている」等が含まれているが、これら「尋ねている」、「確認を求めている」等が本来的な意味

として感動詞に記号化されていることを想定すると、特定の感動詞に対し個別の文脈で理解され得る無限とも言える情報を我々が意味として記憶していることを帰結する。しかしながら、我々の記憶容量の面から考えると、上記想定は非現実的と言えよう。この点に対し、認知語用論的アプローチから新たに提示されている感動詞の捉え方が、前述の、感動詞は聞き手が発話解釈で行う推論を支援するという捉え方である。すなわち、当該の文脈で復元された意味表示の一部を構成している情報とは、聞き手に解読されているのではなく、当該の文脈での聞き手による主体的な推論により埋められているのであり、感動詞はそうした推論の範囲を予め限定することに関与することが主張されている (Blakemore, 2011, Wharton, 2009, Wilson and Wharton, 2006)¹。

ただ、上記の「意味表示の復元において推論範囲を予め限定する」という点 (以下、「解釈の方向付け」と呼ぶ) について、感動詞は必ずしも一様に作用しているわけではない。それは、感動詞という発話が聞き手からみて単なる生理的発話とみなされるか、意図的発話とみなされるかという区別が可能な性質を持ち、聞き手の見積もりが一樣とならないことと関連している。

この点に関し梅木 (未発表) は、話し手の視線が聞き手に向けられているかどうかを聞き手が発話の意図明示性を見積る指標の一つと捉え、感動詞を含む発話を対象とする聞き手の見積りが聞き手の発話解釈上いかなる違いをもたらすかについて、明示的意味 (関連性理論では「表意」と呼ばれる) の復元を中心に調べた。その結果、聞き手は話し手の発話に伴う振る舞いから自分に向けられているという性質 (=アドレス性) を認識することで話し手の発話の意図明示性の高低を見積もり、感動詞による「解釈の方向付け」の程度は、聞き手がアドレス性によって見積もる発話の意図明示性の高さに依存し、解釈の所要時間に短縮が生じること、また一方で、感動詞には視覚的な提示方法の違いによる影響を受け易いタイプと受け難いタイプが存在し、感動詞のタイプにより発話解釈に対する関与が一樣とならないことを指摘した²。

本稿では、梅木 (未発表) に引き続き、発話解釈における感動詞の関与に関し、暗示的意味 (関連性理論では「推意」と呼ばれる) の復元を中心に検討する。本稿の構成は以下の通りである。まず第2節で、認知語用論のアプローチを参考に発話解釈に伴う推論の観点から明示的意味と暗示的意味との区別について概説する。その上で、暗示的意味の復元に対する感動詞の関与が程度差の面で明らかでないことを指摘し、本研究の目的との関連を明瞭にする。次に第

3節で実験の概要を説明し、続く第4節と第5節で実験結果をもとに、発話の意図明示性に対する聞き手の見積りの観点から、暗示の意味の復元に対する感動詞の関与が一様とならないことについて考察する。

2. 問題の所在

2. 1. 明示的意味と暗示的意味

コミュニケーションの推論モデルとして、特に語用論分野を中心に広く認知される関連性理論によると、聞き手は単に話し手から受け取った言語記号の解読のみを行っているのではなく、受け取った言語記号を契機として、話し手が伝えようとした内容を聞き手の心内の意味表示として復元するための、主体的な推論を行っていることが述べられている (Blakemore, 1992, Carston, 2002, Sperber and Wilson, 1995, 等)。

推論によって聞き手が復元する意味表示には、明示的意味と暗示的意味という大きく二つのタイプがあるとされる。明示的意味とは、前掲の (2) や (3) のように、発話の言語形式が文脈に基づいた推論により肉付けされ、その結果として聞き手の心内に得られる意味表示である。これに対し、暗示的意味は、明示的意味をもとに聞き手に推論された (呼び出された) 想定と明示的意味との相互作用の結果として聞き手の心内に得られる意味表示である。

例えば、下記 (4) の聞き手は言語的特性を肉付けすることで (5) のような明示的意味を得るとされる。

(4) 君の論文は長すぎる。

(5) 聞き手が書いた論文は例の学会には長すぎる。

(Blakemore, 1994: 173)

一方、同じ発話 (4) が下記 (6) のように「学会では発表できるかな」という質問に対する答えとして発話された場合、発話 (4) の聞き手は明示的意味 (5) の他、下記 (7) のような結論的想定をも得る。

(6) A: 学会では発表できるかな。

B: 君の論文は長すぎる。

(7) 聞き手は学会には呼ばれなかった。

(Blakemore, 1994: 174)

上記 (7) の結論的想定は、聞き手が (5) の明示的意味と、文脈依存的に推論した下記 (8) のような仮定的な想定とを組み合わせることによって初めて得られるものである³。そのため (5) の明示的意味のように言語的特性から肉付けすることで得られた想定ではない。

(8) もし聞き手の論文が学会には長すぎるならば聞き手は学会で発表できない。
(Blakemore, 1994: 174)

なお、上記 (7) の暗示的意味の復元は、聞き手に導き出せる仮定的な想定 (8) に依存する。よって、暗示的意味の復元は、聞き手が仮定的な想定を導き得るか否かを判断する話し手の見積もりに依存するとされている⁴。つまり、聞き手が導く仮定的な想定を選択に課す、話し手による制約が強くなるほど、より確定的に暗示的意味が生じ、逆に制約が弱まるほど、生じる暗示的意味は不確定となる。

2. 2. 問題点

認知語用論的アプローチでは、聞き手からみて話し手の発話がどのように発話されたとみなされるかという点が暗示的意味の復元にどのように関与するか具体的に示されていない。認知語用論的アプローチにおいて、聞き手が導く仮定的な想定を選択に課す話し手による制約の強弱 (程度) と聞き手が復元する暗示的意味との関連が述べられている。しかし、話し手の発話にも様々な発話がある。例えば、感動詞のように、発話の意図明示性に対する聞き手の見積もりに程度差が生じ得る発話の場合、暗示的意味の復元が聞き手の見積もりと無関係に一樣とはならないのではないだろうか。確かに、聞き手が行う発話の意図明示性に対する見積もりと、聞き手が仮定的な想定を導き得るか否かを判断する話し手の見積もりとの間には、ある程度の平行な関係が成立するかもしれない。しかし、常にそうした関係が成立するかは定かでない。換言すれば、暗示的意味の復元に対する感動詞の関与について、聞き手の見積もりに由来する程度差において十分明らかにされていない。こうした点では聞き手の発話解釈にかかわる推論において解明する余地があり、聞き手の見積もりの観点から暗示的意味の復元について調べる必要がある。そこで本研究では、梅木 (未発表) 同様、話し手の視線が聞き手に向けられているかどうかを聞き手が発話の

意図明示性を見積る指標の一つとして捉え、感動詞を含む発話を対象に、発話の意図明示性に対する聞き手の見積りの観点から、暗示的意味の復元に感動詞がいかに関与するかを調査した。なお、本研究で対象とする感動詞は所謂一次的感動詞に限定する⁵。

3. 実験の概要

3. 1. 刺激

本研究の分析データは、梅木（未発表）で提示した分析データの収集時に同時に収集している。そのため内容に関して重複する部分もあるが、便宜上、改めて述べておく。

提示刺激は、6名の日本語母語話者（男性3、女性3、22歳～29歳）を発話者とする音声動画をビデオカメラ（Sony DCR-HC62）で撮影して作成した動画である（図1⁶）。発話者には、下記〈会話〉に示すような会話をしているとの設定のもと、話し相手である撮影者（A）が発話者（B）の発話ア）～ウ）を、表2に示すように解釈することを念頭に、表情および音声を表出することを求めた。



〈会話〉

A：今度の飲み会の会費4500円だって。どうする？
 B：ア）え↗4500円？
 イ）え↖4500円？
 ウ）え↓4500円？

*「↗」「↖」「↓」は音調の上昇、顕著な上昇、下降、の音韻的な表記（須藤, 2008: 141を参考）。

図1 動画撮影状況

表2 復元される意味表示

	復元される明示的意味	復元される暗示的意味
ア)	今度の飲み会の会費が4500円だと言ったことに対し、確認を求めている。	無し（参加するとも参加しないともいえない）。
イ)	今度の飲み会の会費が4500円だと言ったことに対し、驚いている。	参加すると思う。〈参加しないと思う〉。
ウ)	今度の飲み会の会費が4500円だと言ったことに対し、不審・不満を感じている。	参加しないと思う。

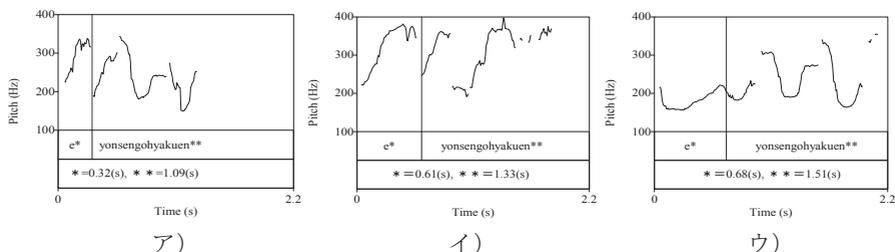


図2 話者 i による発話ア)～ウ)のピッチ変動例 (praat 5.3.59 により作成)

なお、ア)～ウ)の各発話は上記図2に示す通り、いずれの「え」においてもピッチの上昇が観察されるが、ア)に比べ、イ)の上昇は発話時間が長く、ピークが高めとなっており、また両者に対しウ)の上昇は緩やかであるといった点で互いに識別可能な特徴をもつ。これらの発話を発話者一人につき各5回ずつ、視線の有無による2通り、計180発話収集した⁷。

次に、6名の発話者の中から、筆者を含む3名の日本語教師を観察者とし、音声、表情、視線の有無が明瞭と見なした1名の男性(21歳、大学生(演劇部所属))と2名の女性(21歳、大学生(演劇部所属)、29歳、社会人(元劇団員))を選んだ。これらの発話者につき、各種5回ずつの発話から音声、表情、視線の有無に関し、上記ア)～ウ)それぞれの意味表示(以下、「確認」、「驚き」、「不満」と示す)が復元される発話として、相対的に自然に発話されていると見なせる発話を3発話ずつ選出した(発話者3名×発話種3種×3発話×視線の有無2通り)。選出した計54発話の音声動画に対し、下記図3のように、視線なしの音声を視線ありの音声に入れ替えた音声動画と視線ありの全ての音声動画において映像が映らないように編集した「音声のみ」動画とを編集ソフト(AviUtl 1.00)によって作成した⁸。よって実験では計81の刺激を使用した(発話者3名×発話種3種×3発話×3通り)。

3. 2. 手続き

被験者として36名(男性17、女性19、平均年齢23.22歳、SD=3.62)の日本語母語話者が参加した(実験期間:2013年7月26日～2013年8月9日)。被験者の背景を巻末資料に示す。被験者には発話者と面識がある者となない者が混在した。



図3 提示刺激（上が視線あり、下が視線なし）

刺激の提示は、PC（FUJITSU, FMVM30CW）で制御し、実験用ソフト（Cedrus, SuperLab 4.5）により試行条件別に各種刺激がランダムに提示されるようにした。動画は19インチ液晶ディスプレイ（DELL, E190Sb）に、音声はディスプレイの左右に設置したスピーカー（ELECOM, MS-P03AWH）から同時に提示した。被験者とディスプレイの距離は約80cmである。

被験者には、動画を視聴した上で次の二つの質問に回答するよう求めた。質問1では、提示刺激が「確認」・「驚き」・「不満」のうち、どの刺激であるかを強制的・直観的に判定するよう指示し、質問2では、提示刺激からの自身の予測・予想として、相手が今度の飲み会に参加するかどうかについて9段階評定で直観的に判定するよう指示した（-4：参加しない、-2：どちらかといえば参加しない、0：分からない、+2：どちらかといえば参加する、+4：参加する）⁹。本稿で考察対象とする暗示的意味は、質問2に対する被験者の回答である。これらの予測・予想とは、提示刺激の明示的意味を復元し、それをもとに推論した結果得られる結論的想定である。

試行中、回答の所要時間（単位：ms、各質問の回答選択画面に移ってから被験者が回答ボタンを押すまで）を上記実験用ソフトで測定した¹⁰。実験行程は、27試行を1ブロックする、音声のみ条件（27試行）、視線条件（27試行×2ブロック）の計3ブロックを実施し、ブロック間では3分の休憩を取った。なお、実験開始前に本試行とは異なる発話者の刺激による5試行の練習を行った。また、実験後の被験者に刺激の同定や予想の評定について、どうい

う場合にどう回答をしていたかに関する簡単なインタビューを行った。全行程の所要時間は一人につき約20分であった（質問1の回答時間を含めると約35分）。得られたデータの分析にはSPSS Statistics 21を使用した。

4. 結果

4. 1. 予測の強度

下記図4は、提示刺激および提示方法ごとの平均予測の強度と標準偏差を図示したものである。また図5は、提示刺激ごとに視線の有無別にみた平均予測の強度を示す。なお予測の強度に関しては、飲み会に参加しないと思う場合と参加すると思う場合とで符号が異なるため、全ての回答数値に一律4加算し符号を統一した。したがって、4が「どちらとも言えない」であり、0に近づくほど、「参加しないと思う」程度が強く、8に近づくほど、「参加すると思う」程度が強いことを示す。提示方法（2）×提示刺激（3）の2要因分散分析（ともに対応あり）を行った結果、提示刺激の主効果が1%水準で有意であった（ $F(1.57, 70) = 88.64, p < .01$ ）。これに対し、提示方法の主効果に有意差はみられなかった。交互作用は有意でなかった。提示刺激の主効果についてBonferroni法による多重比較を行った結果、確認の平均予測の強度は驚きおよび不満の平均予測の強度より有意に高かった（ $p < .01$ ）¹¹。また、驚きの平均予測の強度は不満より有意に高かった（ $p < .01$ ）。

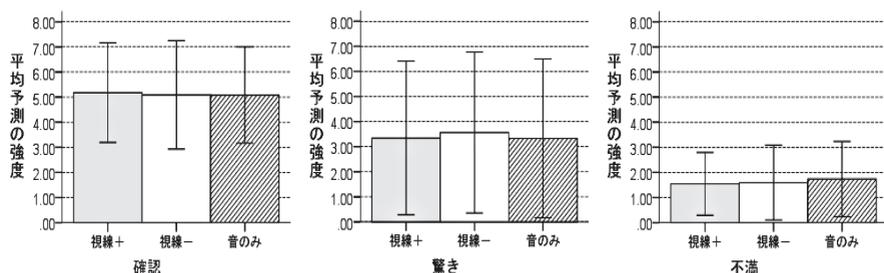


図4 平均予測の強度と標準偏差

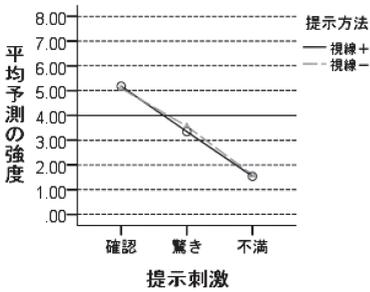


図5 視線の有無別にみた平均予測の強度

4. 2. 予測の反応時間

図6は、提示刺激および提示方法ごとの予測における平均反応時間(ms)と標準偏差を図示したものである。また図7は、提示刺激ごとに視線の有無別にみた、予測における平均反応時間を示す。提示方法(2)×提示刺激(3)の2要因分散分析(ともに対応あり)を行った結果、提示刺激の主効果が1%水準で有意であった($F(2, 70) = 14.01, p < .01$)。これに対し、提示方法の主効果に有意差はみられなかった。交互作用は有意でなかった。提示刺激の主効果について Bonferroni 法による多重比較を行った結果、不満の平均反応時間は確認および驚きの平均反応時間より有意に短かった($p < .01$)。また、確認と驚きとの間に有意差はみられなかった。

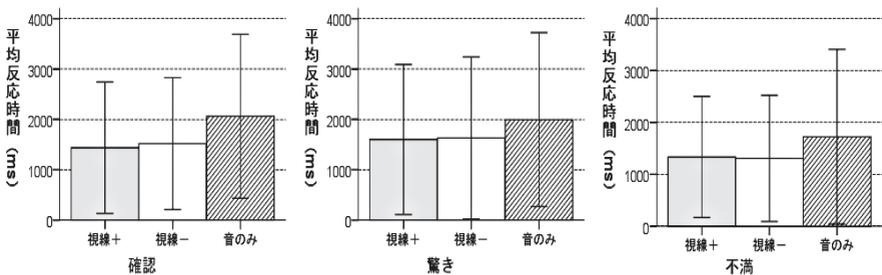


図6 予測における平均反応時間(ms)と標準偏差

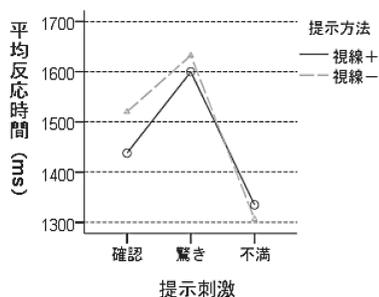


図7 視線の有無別にみた予測における平均反応時間

5. 考察：暗示的意味の復元に対する感動詞の関与

上記実験の結果において、予測の強度に視線の有無による違いはみられなかった。また、予測の反応時間においても視線の有無による違いはないようである。これらの結果をみる限り、感動詞がついた発話から聞き手が解釈として導く暗示的意味と聞き手によって見積られる話し手の意図明示性の高低との間に関連はなさそうである。しかしながら、結果としてみた予測の強さにおいて、元となる刺激がもつアドレス性の相違が反映されなかったとしても、「結果的に同じであった」ということは在り得ることかもしれないが、予測を導くプロセスの観点からすると、「予測の反応時間においても視線の有無による違いはない」という結果は非常に奇妙に思われる。なぜなら、明示的意味に関し、刺激に対して「確認」・「驚き」・「不満」のうち、どの刺激であるかを判定する際の反応時間は、「確認」・「驚き」において視線が向けられる場合の方が向けられない場合より反応時間が短かったのに対し、「不満」において、視線の有無による差がみられず、一様に短かった（いずれも5%の有意水準、梅木、未発表）。これらの結果を含めて考えると、反応時間において、刺激の同定に要する時間に視線の有無による差があるにもかかわらず、同一の刺激から予測を導くことに要する時間に差がないことになるからである。ただ、実験デザインの点から考えてみると、本研究での予測の反応時間は、提示刺激が何であるかを既に同定した状態から予測させた時間となっている。つまり、上記予測の反応時間の結果には刺激の同定に要する時間が含まれていない。通常、相手の発話（反応）が何であるかを一切考慮せずに予測することはないであろう。だ

とすると、予測の反応時間にも何らかの形で刺激の同定に要する時間差が反映されるはずである。

そこで記明示的意味について検討した刺激同定の反応時間（質問1への回答時間）を予測の反応時間に統合し、再度、提示方法（2）×提示刺激（3）の2要因分散分析（ともに対応あり）を行ったところ、以下のように異なる結果となった。下記図8が示すように、交互作用が有意となる（ $F(2, 70) = 10.87$, $p < .01$ ）。提示方法の単純主効果を検定すると、確認では1%、驚きでは5%水準でそれぞれ有意であり、不満では5%水準で有意でなかった（表3）。すなわち、予測に要する時間に関し、確認・驚きにおいて、視線が向けられる場合の方が向けられない場合より反応時間が短いことが分かる。

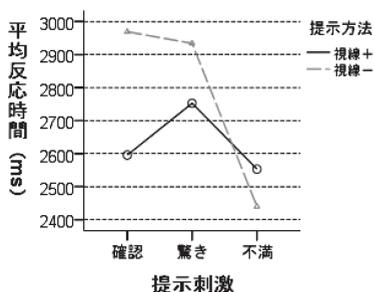


表3 提示方法の単純主効果

	SS	df	MS	F	P
確認	2510169.08	1.00#	2510169.08	14.01	.00**
驚き	591267.71	1.00#	591267.71	4.67	.04**
不満	230621.10	1.00#	230621.10	3.56	.07
誤差		35			

#Greenhouse-Geisser

図8 統合後の結果

上記の分析結果にもとづき改めて検討すると、感動詞を伴う発話から受け手が解釈として導く暗示的意味は、聞き手によって見積られる話し手の意図明示性の高低と間接的に関与することが考えられる。間接的に関与するとは、予測のもととなる刺激の同定に発話の意図明示性に対する聞き手の見積もりが関与する限りにおいて、予測を導く上でも、当然、その影響を受けていることを指す。すなわち、反応時間の観点からみると、感動詞の明示的意味の復元に関し、聞き手は発話に伴うアドレス性の相違より発話の意図明示性を見積もっており、意図明示性が高く見積もれる発話ほど、その解釈としての意味表示の復元における所要時間が短縮される。

コミュニケーションにおいて、我々は、物理的・客観的に存在するあらゆる

情報を一様に処理しているわけではない。視線が向けられていることで反応時間の短縮が生じるのは、解釈としての意味表示を復元する上で行われる処理情報の選択を行う際に、自分に向けられていることが明白がどうかを選択基準としており、選択し易いものほど処理が容易となる。逆に、自分に向けられていることが明白でない情報は、相対的に処理されにくくなるため、その分、時間を要するのであろう。処理すべき情報の選択基準が自分に向けられていることが明白がどうかによらねばならないのは、関連性理論で述べられている通り、通常、コミュニケーションにおいて処理に要する労力に値するという受け手の期待に見合う情報が優先的に選択されるからであり、その情報とは話し手の意図明示性が高い情報だからである。受け手は自分に向けられていることが明白かどうかから、話し手の意図明示性の高さを見積もることができ、そうする限りで、労力に値しない不要な処理（不要な推論も含まれる）をさせられることがないことが保証されている。ゆえに、自分に向けられていることが明白な情報であれば、処理すべき情報の選択に要する時間は不要となるため、刺激の同定における反応時間の短縮が生じると考えられる。それゆえに、明示的意味の復元が容易であるほど、暗示的意味を導く際にも、その所要時間に短縮が生じるものと考えられよう¹²。

ただし、上記、間接的に関与することに関し予め、「刺激の同定に発話の意図明示性に対する聞き手の見積もりが関与する限りにおいて」と条件付きで述べているのは、少なくとも意味表示として「不満」が復元される場合には、上記の説明が当てはまらないからである。感動詞の中には、「不満」のように、自分に向けられていることが明白かどうかにかかわらず、明示的意味が一様に短時間で復元されるものもある。このようなタイプの感動詞は、明示的意味の復元段階において発話の意図明示性の高低を見積もるプロセスを経ずに処理されることが示唆され、話し手の意図明示性の高低に対する聞き手の見積もりが暗示的意味に間接的に関与するという説明が当てはまらない。このことは、暗示的意味の復元に対する感動詞の関与において、聞き手が行う意図明示性への見積もりにかかわる要因とは別に、異なる処理プロセスをとるという要因により程度差が生じ得ることを示している。

一方、予測の強さ（確信度）において、今回の実験では、聞き手による話し手の意図明示性の高低に対する見積もりは関与せず、結果的に同程度の予測となることが示された。ただ、この結果と実験後のインタビューから得られた被

験者のコメントとの間には整合しない部分がみられる。36名のうち12名の被験者（33%）が以下の下線部が示すようにアドレス性の相違により回答する予測の強度が異なるという趣旨のコメントを述べていた。

F3 :

Q2 はほとんどマイナスの方に回答していた。こちらを₁見てるか見てないかという動作がつくと、回答の触れ幅に違いがあった。特に見てないときは、印象として、音声のみのときの自分の判定が思ったほど強くない（弱く感じる）気がした。

F9 :

顔が向けられていると、予想の強さは強まり易く、向けられていないとゼロどちらとも言えない）に近づく。語尾が伸びてないとニュートラルなんだけど、伸びてると感情が入っている。声の高いものは参加しそうと予想し、低いものは参加しなさそうと予想した。

F15 :

視線が向いていると、予想の傾きがはっきりする。

M12 :

驚いているときは、参加したいかしたくないか決めるのが難しかった。目を向けていなかったり、動きが小さいときは、（金額に）納得しているように思い、目を見開いたり、動作が大きくなった場合に参加しない予想が強くなる気がする。

M15 :

一緒に行けるかどうかを考えて回答していた。音だけだと判定しにくかった。音声より顔色やこちちを見ているか見てないかという点に注意していた。こちらを見て言われると、見てないものに比べて「うっ」と感じる度合いが強くなる。そこは予想の強さにかかわっていた。

M16 :

こちらを見ているかどうかで、参加しないとより強く判定していたのは、見ている方だった。見ていない方はあまり関心がないという感じだが、無関心はどちらかという、どちらとも言えないに判定した。

しかしながら、上記のコメントに関し、「実際の回答に具体的にどの程度の違

いとして反映されていることを指しているか」を明らかにすることはできない。ゆえに本稿の結論としては、より具体的に結果を示す統計上の分析結果の方を採用し、聞き手による話し手の意図明示性の高低に対する見積もりは予測の強度に関与せず、「結果的に同程度の子測となる」としておく。

以上のことを手短かに述べると次のようになる。感動詞を含む発話を対象とする暗示的意味の復元においては、聞き手の見積もりによって感動詞の関与が多様化する。また、暗示的意味の復元過程に間接的に関与し得るが、復元の結果には関与しない。

6. 結論と今後の課題

本研究は、感動詞を含む発話を対象に、発話の意図明示性に対する聞き手の見積りの観点から、暗示的意味の復元に対する感動詞の関与について考察した。感動詞を伴う発話における暗示的意味の復元は、明示的意味を復元する際に生じる、感動詞に対する聞き手の見積りに依存する復元所要時間の短縮が間接的影響となり、復元所要時間に短縮が生じる他、感動詞自体のタイプによって異なる処理プロセスを経ることが示唆されることから、一様とならない。ただし、これら復元の過程上の多様さは、復元の結果としての暗示的意味を左右するものではない。

本研究の問題として実験デザインの問題がある。本実験で測定した暗示的意味に対する回答の所要時間は、刺激に接してから暗示的意味を導くまでの所要時間として測定できていない。刺激提示直後に暗示的意味のみについて回答させる追試によって本研究の結果を検証する必要がある。このことはまた、暗示的意味としての予測の強度に関する分析結果と被験者による事後インタビューの内容とが不整合であった点について再検討することとなり、本研究の分析結果の信頼性を高める上で重要と考える。また、感動詞のタイプによって処理プロセスが異なる点の詳細を明らかにする必要があるであろう。濱田・北村・赤木(2010)は、感動詞「ええ」をもとに意図的に音響特徴を制御し作成した合成音声を用い、知覚時の脳活動をfMRIによって測定することで、基本周波数の時間変化と感情音声知覚との関係について検討している。本研究の枠組みで回答者の脳波を測定することで感動詞のタイプにより処理プロセスが異なるかどうかについて明らかにできる可能性がある。今後の課題である。

注

1. Blakemore によると、so, well, however といった談話標識と呼ばれる表現に記号化されている情報も「特定の概念に相当するとは見なすことができず、与えられた文脈における概念的意味表示に関する特定の想定（認知的な集合要素）を派生する手続きが記号化されている」（Blakemore, 2011: 3540）とされる。ただし、Wharton や Blakemore が感動詞や談話標識の全てに上記の手続きが記号化されていると述べているわけではない。記号化の意味論上の議論は Carston（2002）に詳しい。
2. Kamachi, M., Bruce, V. and Mukaida, S., et al. (2001) や 桐田（1993）, 中野・伊藤（2009）等においても、異なる感情の同定課題において「喜び」や「驚き」といったポジティブな感情の認知は表情優位であるのに対し、「嫌悪」や「悲しみ」といったネガティブな感情の認知には表情・音声間の優位性がみられないことが指摘されている。
3. 関連性理論では結論的想定および仮定的想定の両者が推意として扱われる。
4. 例えば、発話（1）の話し手が、あえて直接的に「君は学会には招かれていないよ。」とは言わず発話（1）のように間接的な言い方をしたわけは、論文の内容が悪かったわけでないことを示すことで聞き手を慰めようとしていたのかもしれない。仮にそうであったなら、話し手は結果的に、間接的な返答による余分な処理コストを聞き手が払うことに見合うと見積もっていた「暗示的意味」に関して、聞き手に見出してもらえなかったことになる。なお、Blakemore は以下の B に関し、「話し手に自分の発話の解釈のされ方について事前の予測が全くない場合である。」（Blakemore, 1994: 180）とし、「推意がまったくない場合である。」（Blakemore, 1994: 180）としている。
A : 学会では発表できるかな。
B : いや、できないよ。 (Blakemore, 1994: 180)
5. Ameka（1992）には一次的感動詞の特徴として、1) 感動詞として以外に用いられない、2) 単独で一つの発話を形成できる、3) 通常、他の品詞と何かを構成するということがない、4) 通常、活用することがなく、他の品詞に転換することがないことから生産的ではない（non-productive）ことがあげられている。

表1 感動詞の下位分類（* Ameka (1992) を参考。網羅したものではない。）

	日本語	英語
一次的感動詞	うーん（と）、えー（と）、さー、あー あ、ふーん、へー、えー、お（つと）、 もう、きゃー、すー（吸気）	wow, yuk, aha, alas, boo, ouch, dear, oops, ah, oh, ow, er, huh, eh, tut-tut (tsk-tsk), brrr, shh, ahem, psst, bother.
二次的感動詞	よっこらしよ（つと）、くそっ、あ のー、さて（と）、では（じゃ）、挨拶 類、はい、うん、ううん、ほら	hell, bloody, bastard, damn, shit, fuck, goodbye, yes, no, thanks, well, so

6. 本稿で掲載する実験協力者の写真に関し、本人の了承を得た。
7. 視線方向の統制として、撮影者からの問いかけの直後に、視線を撮影者に向けたまま発話する場合と、一端視線を撮影者に向けてから視線を手元のPCに戻し、発話時に撮影者に視線が向けられない場合の2種類を行うように発話者に指示した。
8. 実験では用意した刺激に対し視聴者が会話に参加している想定の下での解釈を問うため動画内の撮影者の音声は消去し、発話時間と同期した字幕を挿入した。
9. 回答の際は上記の会話を被験者が撮影者の立場で親しい友人と行っているという想定の下、提示される刺激を自分が行っている会話における相手の発話と見立て、自分が普段の会話で行っているような解釈として回答するように依頼した。
10. 画面上では一つの刺激の提示が終了した直後に（発話の終了直後に）質問1の回答選択画面に移り、被験者によって回答ボタンが押された直後に、質問2の回答選択画面に移る。同様に、被験者が質問2への回答ボタンを押した直後に、次の刺激の提示へと移る仕様となっている。厳密には、ここでの測定値が提示刺激の認知処理に要する時間であるとはいえないが、本研究では、これを認知処理に要する時間の近似値として扱う。
11. 本研究の単純主効果の検定および多重比較には、プールした誤差項を使用していない。竹原（2007, p.175）を参照のこと。
12. 明示的意味を復元すると、常に暗示的意味を導くという意ではない。

卷末資料：被験者の背景 (f: 女性、m: 男性)

性別	age	職業(専門)	f13	20	学生(英文学)	m7	21	学生(英文学)
f1	25	学生(日本語学)	f14	20	学生(英文学)	m8	25	学生(西洋史)
f2	26	学生(日本語学)	f15	21	学生(英文学)	m9	24	学生(教育学)
f3	27	学生(医科学)	f16	21	学生(西洋美術)	m10	23	学生(フランス文学)
f4	21	学生(日本語教育学)	f17	22	学生(西洋美術)	m11	27	大学職員(西洋史)
f5	21	学生(日本語教育学)	f18	21	学生(言語学)	m12	24	学生(教育学)
f6	21	学生(日本語教育学)	f19	21	学生(日本語教育学)	m13	25	学生(心理学)
f7	20	学生(日本語教育学)	m1	26	日本語教師	m14	23	学生(心理学)
f8	22	学生(日本語教育学)	m2	19	学生(経済学)	m15	25	学生(比較文化史)
f9	22	学生(日本語教育学)	m3	22	学生(日本語学)	m16	29	大学職員(西洋史)
f10	23	学生(日本語学)	m4	23	学生(日本語学)	m17	25	学生(西洋史)
f11	39	日本語教師	m5	21	学生(日本語教育学)	計36人		
f12	20	学生(英文学)	m6	21	学生(日本語教育学)			

参考文献

- Ameka, F. (1992) Interjections: the universal yet neglected part of speech. *Journal of Pragmatics* 18: 101-118.
- Blakemore, D. (1992) *Understanding utterances*. Oxford: Blackwell. (武内道子・山崎英一訳 (1994) 『ひとは発話をどう理解するか』, ひつじ書房.)
- Blakemore, D. (2011) On the descriptive ineffability of expressive meaning. *Journal of Pragmatics* 43: 3537-3550.
- Carston, R. (2002) *Thoughts and Utterances: The pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell. (内田聖二他訳 (2008) 『思考と発話一明示的伝達の語用論一』, 研究社.)
- 濱田康弘・北村達也・赤木正人 (2010) 「fMRI による感動詞「ええ」呈示時の脳活動測定」『日本音響学会研究発表会講演論文集』: 595-598.
- Kamachi, M., Bruce, V. and Mukaida, S., Gyoba, J., Yoshikawa, S., Akamatsu, S. (2001) Dynamic properties influence the perception of facial expressions. *Perception* 30: 875-887.
- 桐田隆博 (1993) 「表情を理解する」吉川佐紀子・益谷真・中村真 (編) 『顔と心ー顔の心理学入門ー』サイエンス社: 197-221.
- 中野良樹・伊藤由美 (2009) 「感動詞「エー」を表出した表情と音声に対するマルチモーダルな感情認知」『感情心理学研究』16 (3) : 195-208.
- Sperber, D. and Wilson, D. (1995) *Relevance: Communication and cognition*. Second edition. Oxford: Blackwell. (内田聖二他訳 (2002) 『関連性理論』(第二版), 研究社.)
- 須藤潤 (2008) 「音声の特徴から見た日本語感動詞の機能」博士論文, 大阪大学 (旧大阪外国語大学) .

- 竹原卓真 (2007) 『SPSS のスヌメ 1—2 要因の分散分析をすべてカバー—』 北大路書房 .
- 梅木俊輔 (未発表) 「感動詞の意味表示と言語的意味表示とのインターフェイス」 .
- Wharton, T. (2009) *Pragmatics and Non-Verbal Communication*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wilson, D. and Wharton, T. (2006) Relevance and prosody. *Journal of Pragmatics* 38: 1559-1579.
- 吉嵩志保・蒲池みゆき・箱田裕二、他 (2000) 「視線が表情認知に与える影響」『信学技報』HIP99-67: 19-24.